第 523 回 越谷市郷土研究会 史跡めぐり

令和 5 年 6 月 25 日（日）
午前の半日コース ※雨天決行

越谷リバーウォーク（Ｅコース）

古の「奥州古道」と令和の「緑道を歩く」

今年度新設したコースです。元荒川緑道を中心に越谷駅まで歩きます。

作画：高橋誠一様

上の QR コードで「Google マイマップ」が閲覧可能
◎案内者 秦野グループ（秦野秀明・河内出・福田博・瀧田雅之・須藤賢一）

ＮＰＯ法人 越谷市郷土研究会

順路　全行程　徒歩約 6.16 キロメートル

◎集合…JR 武蔵野線「越谷レイクタウン駅」北口 午前 8 時 30 分
〇出発「越谷レイクタウン駅」北口
・見田方遺跡公園
①大相模調節池
②元荒川（利根川本流）の旧河道（推定）
〇宇田氏館跡
③大相模調節池取水施設
・大成川排水機場
・下河原排水機場
④「正保国絵図」記載の「奥州古道（堤土手道）」
⑤外池跡
⑥内池跡（おいてけ堀）
⑦大相模河畔砂丘
⑧大相模久伊豆神社
〇「正保国絵図」記載の「奥州古道（堤土手道）」
⑨西方日枝神社（山王社）
・不動排水機場
〇相模町スポット広場（トイレ休憩）
〇不動橋
⑩不動の渡し跡
⑪大聖寺
〇奥州古道（元荒川緑道）
・堂端落しスポット広場
・堂端落し排水機場
・斎藤豊作生家跡
・瓦曽根堰スポット広場
〇旧赤水門スポット広場
〇しらこばと橋
⑫元荒川中土手
⑬旧平和橋跡
⑭平和橋
〇帰着「越谷駅」東口
◎解散…東武鉄道「越谷駅」東口 午後 12 時 30 分ごろ

※①～⑭…主な見学先
※天候や時間などによって案内者の判断で見学先が省略されることもあります。
※トイレは相模町スポット広場・大聖寺と平和橋のたもとに公衆トイレがあります。

○越谷レイクタウン駅
平成 20 年（2008）3 月開業。平成 24 年（2012）南口開設

・見田方遺跡
見田方遺跡（みたかたいせき）は昭和 41 年（1966）・42 年（1967）に発掘調査された古墳時代後期（5 世紀後半から 6 世紀）の遺跡です。当時の住居跡が発掘され、土器や糸を紡ぐための道具（紡錘車）、武器や装飾品を石で模造した祭祀のための道具（石製模造品）、漁業用のおもり（土錘）などが出土。昭和 42 年（1967）に越谷市の文化財（記念物・史跡）に指定されました。（※１）

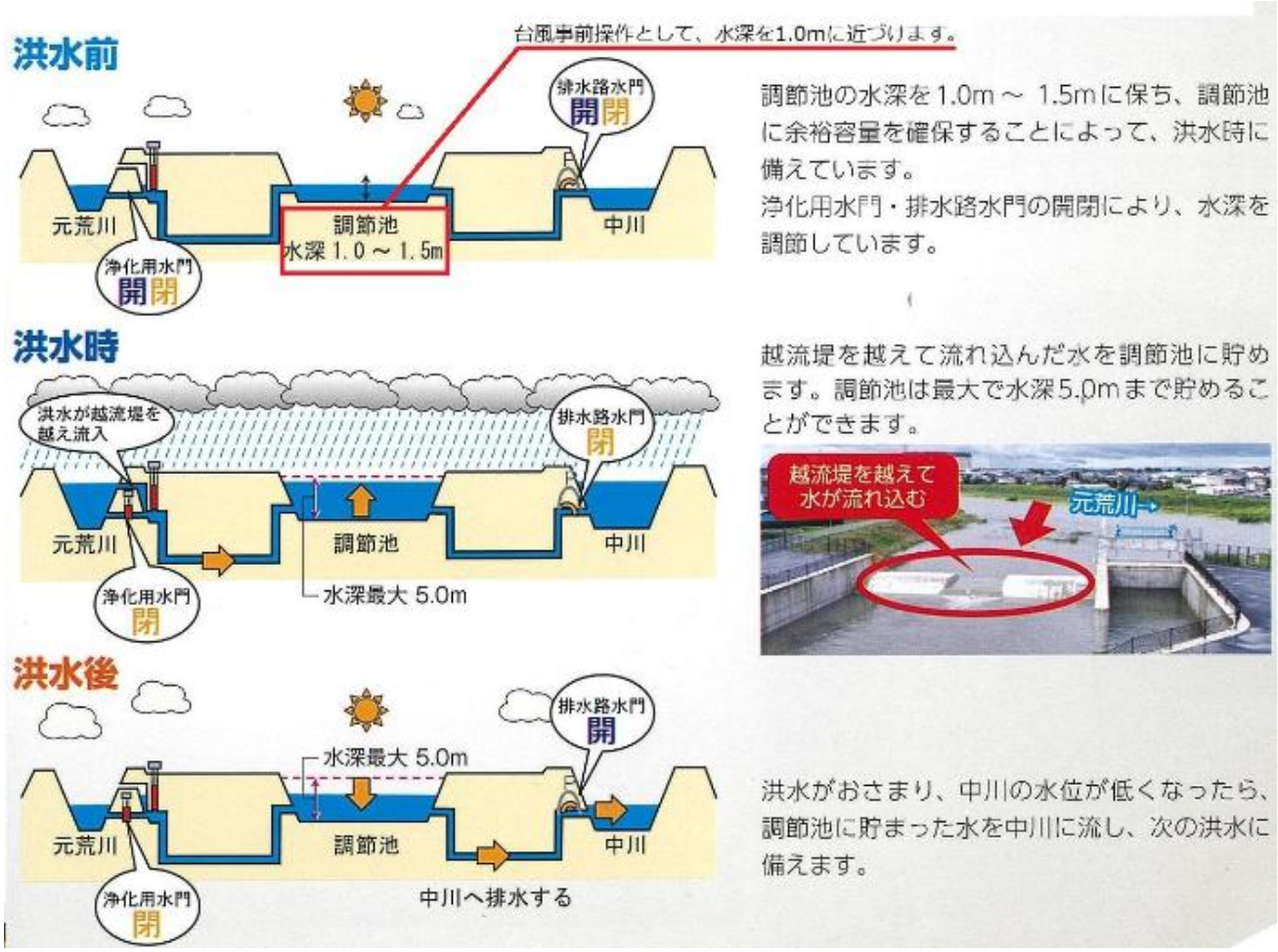
見田方遺跡から出土した土器（※２）

・見田方遺跡公園
遺跡が発見された字名を記念して「見田方遺跡」と命名。昭和 50 年（1975）に「見田方遺跡公園」（みたかた・いせきこうえん）として開園されました。出土した遺物は、現在、旧東方村中村家住宅に展示されています。（※３）

※１※２※３（出典）越谷市指定　記念物・史跡　見田方遺跡
https://www.city.koshigaya.saitama.jp/citypromotion/rekisibunka/bunkazai/mitakataiseki.html

①大相模調節池
大相模調節池（おおさがみちょうせつち）は、「新しく水との共存文化を創造する都市」をスローガンとした越谷市の地区整備事業「越谷レイクタウン事業」の一貫で、元荒川流域の浸水被害を軽減するためにつくられました。調節池に貯めることができる水量は 120 万立方メートル（東京ドームおよそ 1 杯分）。外周はおよそ 2 キロメートルあります。

（出典）越谷市観光協会 大相模調節池～レイクタウン周辺
https://www.koshigaya-sightseeing.jp/spot-play/spot/%e5%a4%a7%e7%9b%b8%e6%a8%a1%e8%aa%bf%e7%af%80%e6%b1%a0%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6/
大相模調節池 洪水調整のしくみ



（出典）越谷市 大相模調節池の水位調整について

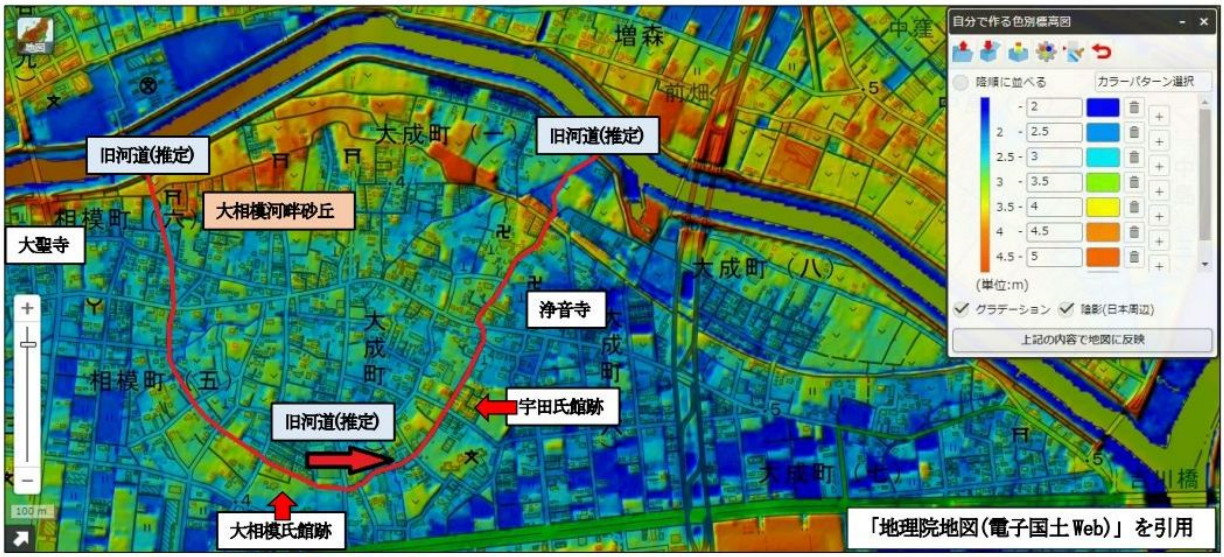
https://www.city.koshigaya.saitama.jp/anzen_anshin/bosai/kasenchisui/oosagamisiityousei.html

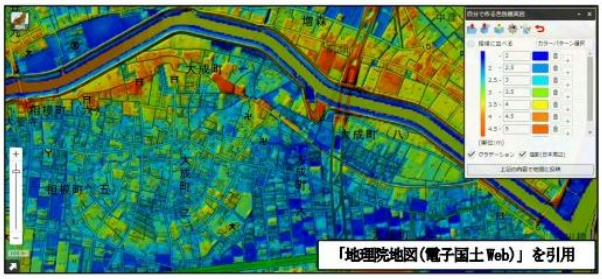
②元荒川（利根川本流）の旧河道（推定）

越谷市郷土研究会・副会長の秦野秀明氏が、「大相模郷」の地形は「元荒川（利根川本流）」の「旧河道」が形成した、という仮説を 2023 年 6 月に発表しました。

秦野氏が作成した旧河道の地図を見ると、大相模河畔砂丘の南側をU字状に流れていたと推定される元荒川（利根川本流）旧河道の右岸側に沿って、「大相模氏館跡」「宇田氏館跡」「浄音寺」が、旧河道を裏付けるように位置しています。

※秦野氏が作成した旧河道の地図は下の QR コードで閲覧可能





仮説
「大相模郷」の地形は
「元荒川(利根川本流)」の
「旧河道」が形成した。
NPO 法人越谷市郷土研究会
秦野 秀明

（出典）秦野秀明（2023）仮説「大相模郷」の地形は「元荒川（利根川本流）」の「旧河道」が形成した。
http://koshigayahistory.org/230614_ohsagamigoh_h_h.pdf

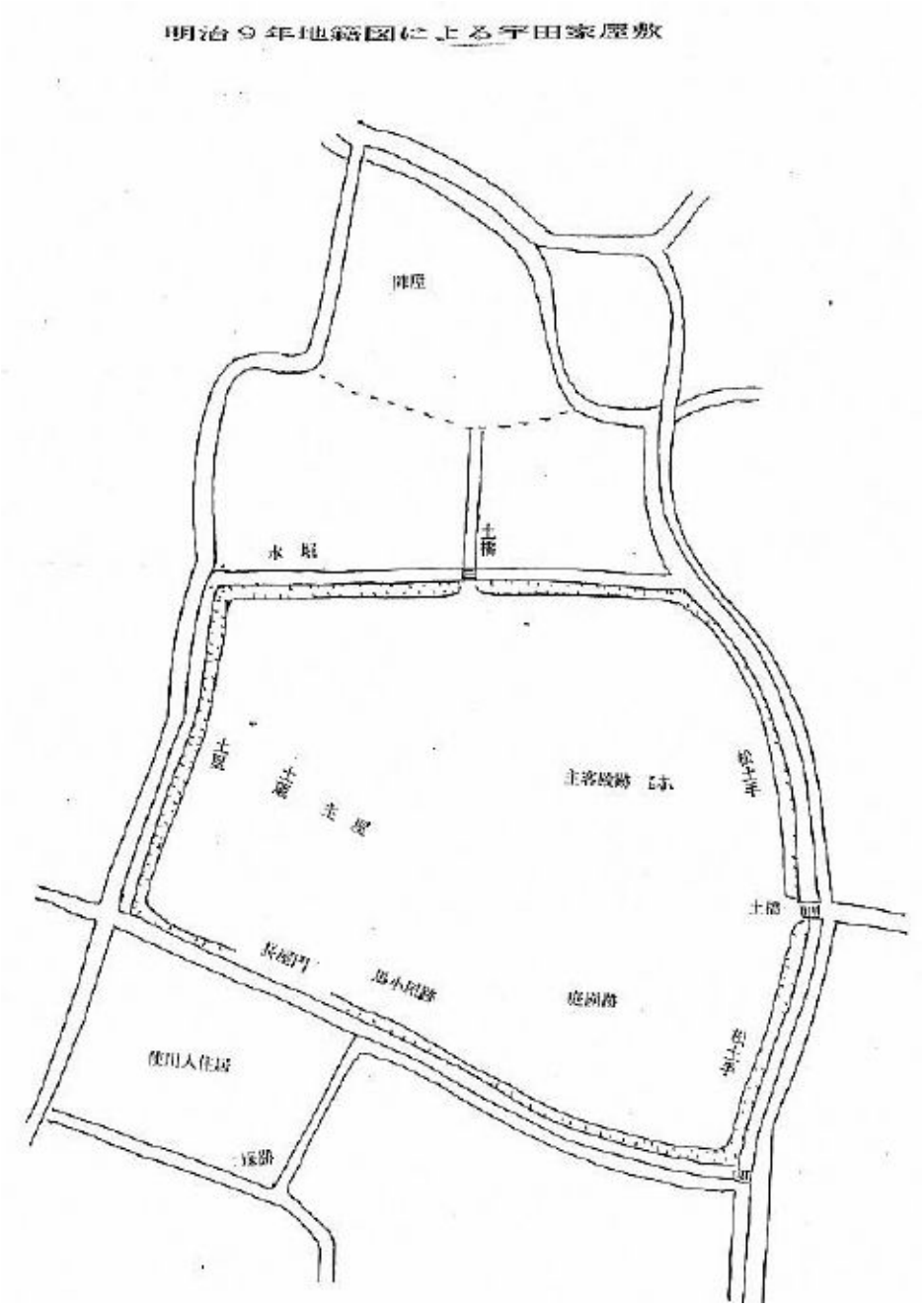
（資料）大相模氏と宇田氏については、越谷市郷土研究会資料「越谷市における中世城館跡」（高崎力、1988）に詳しく書かれています。宇田氏屋敷の位置と屋敷内の施設について、高崎氏は次のように述べています。

宇田家屋敷は、元荒川の流路によって堆積された広い半円形をした大相模自然堤防上の東南端に位置し、標高 3.9 メートル（昭和 30 年頃は 4.7 メートル）の微高地にあり、旧屋敷全体は縦長の不等辺長方形、同じ大相模の中村家屋敷（大相模氏館）と形状、面積がほぼ一致している。

周囲は水堀と内側に土塁を築き、長屋門南西に使用人を住まわせた一角が突き出ていた。旧屋敷地の北に陣屋といわれた建物があり通常の業務処理はここで執行していた。

現在、大相模小学校グランドになった場所は畑であったが、それ以前はここに庭園を眺める二階建ての客殿があった。長屋門を入った右手に大きな馬小屋があり、忍領主の訪問時にはこの客殿に宿泊し、お供の者は陣屋に停泊したといわれる。

（出典）高崎力（1988）「越谷における中世の城館跡」19 頁
http://koshigayahistory.org/131.pdf（右の QR コードで閲覧可能）



（出典）画像「明治 9 年地籍図による宇田家屋敷」は「越谷における中世の城館跡」から転載

○宇田氏館跡

（写真）大相模小学校運動場

宇田氏館があった場所は、大相模小学校運動場の西側です。左の写真は大相模小学校運動場。高崎氏が「現在、大相模小学校グランドになった場所は畑であったが、それ以前はここに庭園を眺める二階建ての客殿があった」（※４）と述べているあたりです。上の図も参照。

※４　高崎力（1988）「越谷における中世の城館跡」19 頁

（資料）改刻塞神塔

大相模小学校運動場東側の道を北に進んだ途次、変則十字路の角地に、道しるべを兼ねた改刻塞神塔（かいこくさえのかみとう）があります。造塔は江戸後期・享和 3 年（1803）。正面に「塞神」、側面に「右　野道」「左　吉川道」（※5）と刻まれています。

※5 造塔年および主銘・脇銘は加藤幸一（2019）「大相模地区の石仏」平成 16・17 年度調査／令和元年 9 月改定（越谷市立図書館所蔵）「見田方 12. 改刻塞神塔」25 頁に従いました。

改刻塞神塔

塞神とは、疫病（伝染病）や悪霊（たたりをする死霊）が侵入してくるのをさえぎる神である。明治元年の明治新政府による神仏分離の実施時に、忍藩（現、行田市）では、国学者で復古神道を体系化した平田篤胤の「庚申などと申すな、塞神と唱えよ」との影響を受け［中略］忍藩（おしはん）内の庚申塔に対しては表面を削るなどして、「塞神」と改刻する政策を強行した。［中略］忍藩の飛地である柿ノ木領八か村もその対象となり、八か村のひとつである見田方村にも当然見られた。（※6）

（※6）加藤幸一（2019）「大相模地区の石仏」平成 16・17 年度調査／令和元年 9 月改定（越谷市立図書館所蔵）「見田方 12. 改刻塞神塔」69 頁

③大相模調節池取水施設

大相模調整池取水施設は、大相模調節池（レイクタウン）の水源です。平常時、元荒川から水を取り入れて、地下の導水路を通じて大相模調節池に水を送ります。取水施設には、水を取り入れる「越流堤」と「浄化用水門」、異常出水時に洪水流入を防ぐ「導水路水門」などがあります。（写真は導水路水門）

（出典）埼玉県 大相模調節池の主な施設
https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/195273/10oosagami.pdf

・大成川排水機場

大成川排水機場は 越谷市大成町 1-207 にある排水機場です。

・下河原排水機場

下河原排水機場は 越谷市大成町 1-215-17 にある排水機場です。

④奥州古道

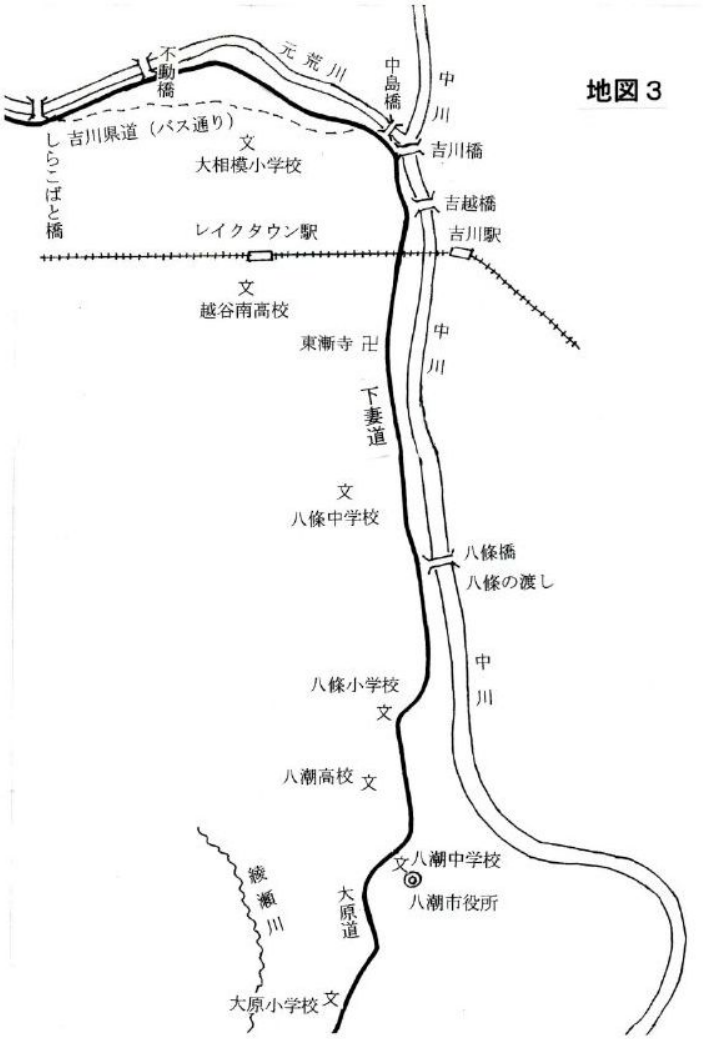
越谷市内には、江戸時代以前から奥州（東北地方）との往来に使われたとされる道（奥州古道）が、何箇所か残っています。

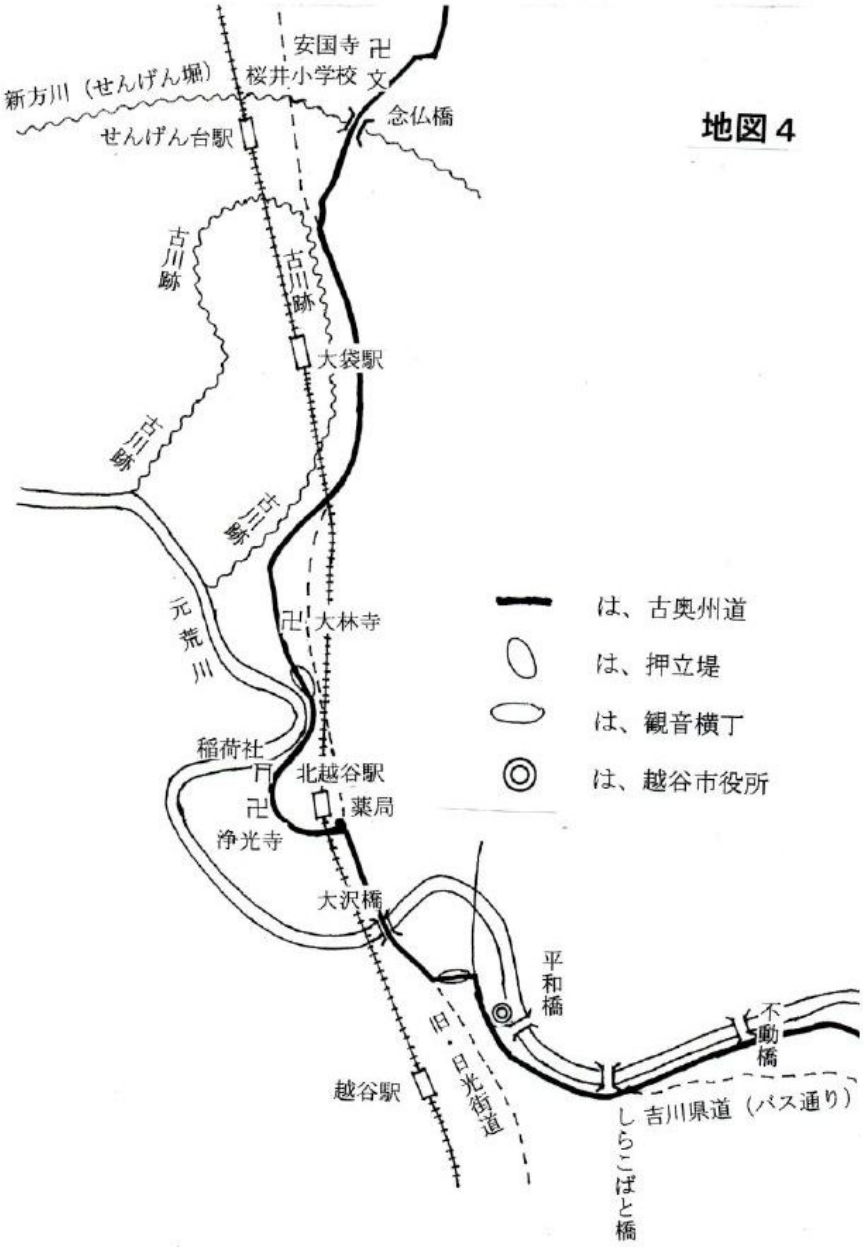
越谷市郷土研究会の加藤幸一氏は、奥州古道について「私たちになじみの深い『日光街道』（江戸時代の日光道中）は、江戸幕府によって江戸時代初期にできた凡そ直線の道路である。その頃に草加宿や越ヶ谷宿、粕壁宿が誕生した。しかし、江戸時代以前から人々が奥州（東北地方）との往来に使う道は、越谷市内の各所に遺るがこれを『奥州古道』と呼ぶ」（※７）と述べています。

※７ 加藤幸一（2023）「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道（令和５年改訂版）」本文［前書き］より引用

今回の史跡めぐりでは、越谷市内を通る奥州古道のうち「正保国絵図」（正保元年（1644）に幕府より作成が命じられた）に記載された「堤土手道」と「元荒川緑道」を歩きます。

越谷市内を通る奥州古道（一部）





地図３・地図４（出典）加藤幸一（2013）江戸時代以前の奥州道
http://koshigayahistory.org/432.pdf

加藤氏の上記論考は下の QR コードで閲覧可能

⑤外池跡

かつて、見田方の八坂神社（越谷市大成町 1-71-1）の北と西に、土手道（堤防）をはさんで、外池と内池がありました。今は面影もありません。

天明 6 年の関東大洪水と内池

八坂神社の裏では、天明 6 年（1786）の大洪水による土手道（堤防）決壊によって土手の内側に元荒川の水が入り込んで曲流し、それが広大な内池となった。

一方、観音寺（越谷市大成町 1-2291-1）の裏に元荒川から取水する堀（現・大成川）があるが、その堀の観音圦（土手の下などに樋を埋めて水の出入りを調節する水門）あたりの土手道（堤防）が決壊し、土手道の北側（河原側）に外池、土手道の南側に内池ができた。

（出典）加藤幸一「大相模地区の石仏」平成 16・17 年度調査／令和元年 9 月改定（越谷市立図書館所蔵）「天明六年の関東大洪水と内池」70 頁

人柱伝説

外池には、天明 6 年（1786）の大洪水で「決壊した堤防の修復にあたって、再び破堤しないようにと巡礼娘を人柱にした」（※８）という、人柱伝説が残っています。

※８『越谷ふるさと散歩（上)』越谷市史編さん室（昭和 54 年 8 月 2 日発行）85 頁

人柱にされた巡礼娘を供養するために建てられたとされる石塔（「水龍大権現」文字塔）が、盛土された外池跡に、今も残っています。劣化がひどく造立年代は不詳。

「水龍大権現」文字塔

（出典）加藤幸一「大相模地区の石仏」平成 16・17 年度調査／令和元年 9 月改定（越谷市立図書館所蔵）「見田方 6.『水龍大権現』文字塔」24 頁

⑥内池跡（おいてけ堀）

見田方の八坂神社裏に、弁財天が祀られている「内池」（うちいけ）があります（通称・おいてけ堀）。空堀（からぼり）の真ん中に土が盛られ、小さな祠が建っています。「内池弁財天」と赤文字で刻まれた神額が掛けられている石鳥居は、令和４年（2022）12 月に後方農地管理組合によって建立されたもの。

弁財天のご神体

弁財天のご神体は、「高さ 31 センチの板碑（主尊が梵字で表現された阿弥陀如来）の破片」（※９）で、八坂神社の境内にある祠の中に納められています。

※９　加藤幸一「大相模地区の石仏」平成 16・17 年度調査／令和元年９月改定（越谷市立図書館所蔵）「天明六年の関東大洪水と内池」70 頁

おいてけ堀伝説は誤りだった

弁天様を祀る弁天内池には「おいてけ堀伝説」があったとされていますが、越谷市郷土研究会・顧問の加藤幸一氏は、おいてけ堀伝説はもともと地元にはなく、本来地元に伝わる伝説は、大きな白いヘビが棲んでいる「白蛇（はくじゃ）伝説」だけだとし、「おいてけ堀伝説は誤りである」と、しています。

（出典）加藤幸一（2023）「見田方の八坂神社裏の知られざる白蛇伝説」令和５年２月 19 日「こしがや文化芸術祭」展示原稿

見田方の八坂神社裏の知られざる白蛇伝説

加藤幸一

大相模地区の見田方の八坂神社裏には江戸時代から弁天社を祀る「弁天内池」という巨大な池がありました。元荒川の堤土手道のすぐ内側（人が住んでいる村側）にあるから内池と呼ばれたのです。この弁天内池のそばを通りかかる時に「オイテケ、オイテケ」という声が聞こえたら、手に持っている物をすぐに置いて逃げるというオイテケ堀伝説があったと昭和54年発行の「越谷ふるさと散歩（上）」で紹介しています[注1]。その話はその後も新住民の間に広がっていきましたが、このような伝説はもともと地元にはありませんでした。さらにそれより19年前の昭和35年発行の「越谷市の史蹟と伝説」では「（内池の白蛇の伝説の他に）また一つにはこの内池をオイテケ堀と呼ばれている。」として江戸の本所のオイテケ堀伝説の影響を受けて白蛇伝説とは別の、もう一つの伝説として紹介しています[注2]。これがその後の誤りの元となったのでした。地元で伝わる本来の伝説は大きな白い蛇が住んでいるとの「白蛇（はくじゃ・しろへび）伝説」だけです。

昭和14年発行の中村徳二郎[注3]著「大相模郷土史」には、「（寂しく不気味な所にあった）この池（弁天内池）の主はかなり大きな白蛇で、たまに通りかかる人を（白蛇は巨大な姿を現して）池の中に引き込んでは、（白蛇は池底に潜んで虎視眈々と）身を隠していたのであった。そこで地元の人々はここに（水の神様の）水神宮と弁天を（池の中央の小島に）祀ることにした。すると、いつしか白蛇は（人々の前に）出現することはなくなった。」と書かれています。オイテケ堀伝説は元々無かったことが資料により判明したのです。（　）内は加藤が加筆しました。

加藤の聞き取り調査では、地元の宇田春吉氏（大正15年生まれ）に伺ったところ、「オイテケ堀」の話は知らないし、地元では聞いたことがないとのことでした。宇田氏から聞き取りした詳細な内容を別紙の[注4]に掲載しました。他の古老にも聞き取りをしましたが、同じように「オイテケ」の話は知らないと言っていました。

また、新住民からの聞き取りを紹介しますと次の通りです。

Ａさん（女性・現在は他の地に移転）は、子供の頃から弁天内池のそばの住宅地に移り住んでいて、地元住民からここもかつては隣の湿地帯（「弁天内池」）の続きと聞かされていました。祖母からは、あの内池の湿地帯で白蛇（しろへび）を見たと聞きました。祖母はこの池に白蛇の伝説があることを知っていたから見間違いをした可能性もないとはいえませんが、偶然にも事実だと思います。彼女は近くの古くからの地元住民に「オイテケ堀」の伝説があったことを伝えると、誰もがそのようなことは「知らない、初めて聞いた」といわれ、それ以来疑問を持ち続けていました。そこに聞き取り調査を受け、ようやくその矛盾が解けて納得されたようです。

この内池のでき方ですが、昭和54年発行の「越谷ふるさと散歩（上）」では元荒川の決壊によってできたとされていますが、元荒川ではなく元荒川より古くから流れていた元荒川の古川であったと推測できます[注5]。弁天内池はこの古川の決壊によってえぐり取られてできたのです。これを「押堀」と呼んでいます。

今では都市開発によって大きく変わり、巨大な内池もなくなり、埋め立てや土盛りされて新しくできた空堀にわずかに弁天様の祠が残るだけになりました。昔の面影は全くありません。
地元由来の「白蛇伝説」を文化遺産として後の世まで残しておきたいものです。

令和5年2月19日「こしがや文化芸術祭」展示原稿

⑦大相模久伊豆神社

住所は埼玉県越谷市大成町 1-2159。創建年代は不詳。旧・東方村（現・大成町）の鎮守。江戸後期、幕府が編さんした地誌『新編武蔵風土記稿』「東方村」の項に、「久伊豆神社 村の鎮守、安楽院の持、末社 稲荷 天神」（※10）とあります。

※10『新編武蔵風土記稿 第十巻（大日本地誌大系）⑯』雄山閣（平成 8 年 6 月 20 日発行）「東方村」173 頁

歴史（境内の案内板より引用）

この地はもと大相模郷の東方村（現・大成町）で、久伊豆神社はこの村の鎮守社であった。当地は元荒川をひかえた奥州旧街道の道筋にあたり、早くから開けたところで、武蔵七党野与党の一族、大相模次郎能高が本拠した地と伝えられている。久伊豆神社はもと野与党の氏神といわれ、野与党の武士が居住した地に久伊豆神社が勧進されている。

当社は、明治 41 年（1908）同村の稲荷社、八幡社、天神社、神明社などを合祀し、現在、大己貴命（おおあなむちのみこと）、菅原道真（すがわらのみちざね）、天照大神（あまてらすおおみかみ）、与田別命（よだべつのみこと）など七柱が祭神として祀られている。境内入口には樹齢数百年と言われている直径 1.5 メートルにも及ぶ銀杏の大木があり、太いしめ縄が張られている。また、境内には文化 4 年（1807）銘の御手洗石などがある。

久伊豆神社は大相模河畔砂丘の頂上に鎮座

久伊豆神社は大相模河畔砂丘の一画にありますが、標高は 5.9 メートル（※11）。大相模河畔砂丘のもっとも高い位置に鎮座しています。

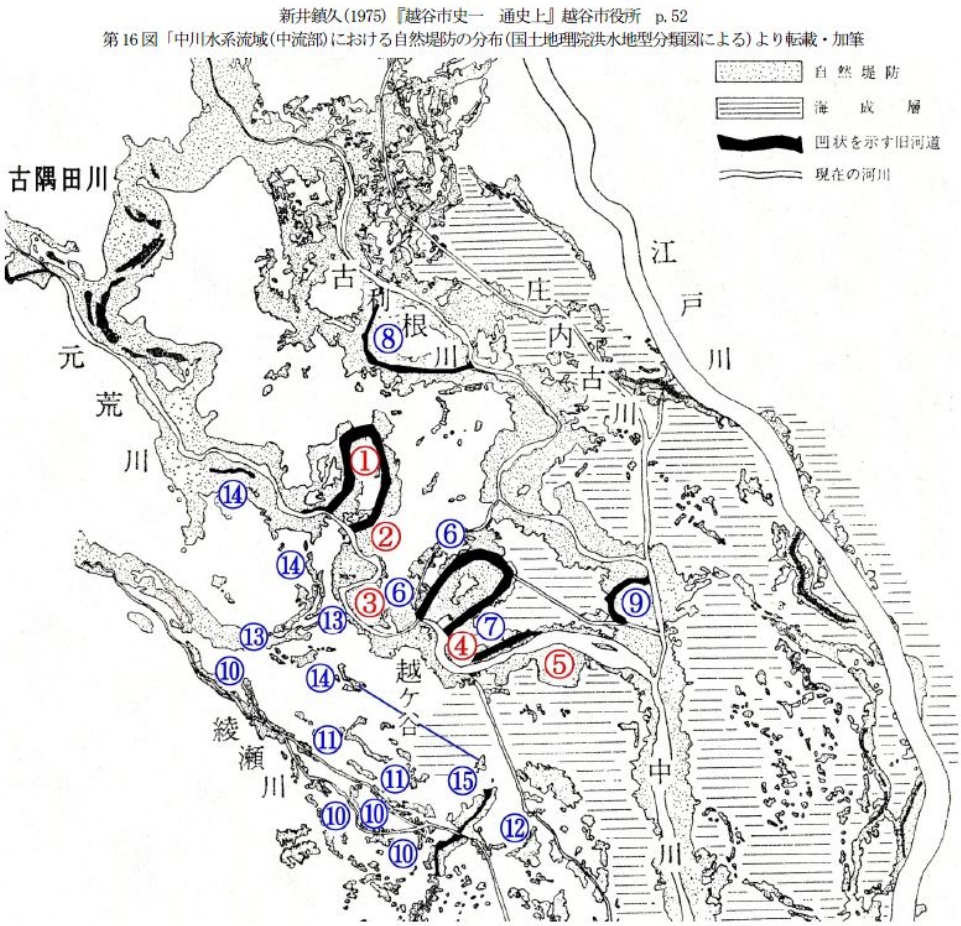
※11 秦野秀明（2021）越谷市内の「河畔砂丘」及び「自然堤防」の標高
http://koshigayahistory.org/211215_hyohkoh_h_h.pdf

秦野氏の上記論考は下の QR コードで閲覧可能

⑧大相模河畔砂丘

越谷市内には、元荒川の曲流（曲流跡）沿いに、五つの河畔砂丘（かはんさきゅう）があります。

（１）袋山河畔砂丘
（２）大林河畔砂丘
（３）北越谷河畔砂丘
（４）東越谷河畔砂丘
（５）大相模河畔砂丘



（出典）画像は秦野秀明（2016）河川の造った地形―越谷市内の河畔砂丘と自然堤防―（※12）より転載

大相模河畔砂丘は五つのうちのひとつです（上の図の⑤）

大相模河畔砂丘は、「旧西方村の北東部と旧東方村の北部及び旧見田方村の北部を、現在も北を凸に取り囲むように流れている元荒川の曲流の南側に沿って発達」(※12) しています。

※12 秦野秀明（2016）河川の造った地形―越谷市内の河畔砂丘と自然堤防―
http://koshigayahistory.org/160228_bgs_hh.pdf

越谷市内の河畔砂丘と自然堤防

越谷市内の河畔砂丘と自然堤防について、越谷市郷土研究会・副会長の秦野秀明氏は次のように述べています。

越谷市内で最も注目すべき地形は、河川によって造られた河畔砂丘である。自然堤防の上に造られた河畔砂丘は、北西からの季節風によって運ばれた砂の層の高まりによって認定され、蛇行する流路の袂に相当する地点の風下側（東側または南側）に出来やすいことが明らかにされている。また、かつての利根川とみられる流路（流路跡）沿いにのみ分布する河畔砂丘が、越谷市内では、元荒川の曲流（曲流跡）沿いに、「５つ」もあることから、元荒川はかつての利根川の本流であったとみられる。

［中略］

越谷市内には、河畔砂丘を造った曲流（曲流跡）以外にも、自然堤防を造った流路（流路跡）も数多くある。この自然堤防は、大きな河が繰り返し氾濫した結果として造られた地形である。

［中略］

越谷市内の河畔砂丘と自然堤防の上には、古い寺社やお寺が数多く建立された。同様に、中世に建てられた板碑も、越谷市内の河畔砂丘と自然堤防の上で、数多く発見された。このことから、かつては大部分が低湿地帯であった越谷市内において、いち早く人々が住み始めた場所こそが、河畔砂丘と自然堤防の上の微高地であったということができる。

（出典）秦野秀明（2016）河川の造った地形―越谷市内の河畔砂丘と自然堤防―
http://koshigayahistory.org/160228_bgs_hh.pdf

秦野氏の上記論考は下の QR コードで閲覧可能

越谷市内の河畔砂丘と自然堤防について詳しく知りたい方はぜひご一読ください。

⑨西方日枝神社（山王社）

住所は埼玉県越谷市相模町 6-481。創建年代は不詳。旧・西方村（現・相模町）の鎮守。江戸後期、幕府が編さんした地誌『新編武蔵風土記稿』「西方村」の項に、「山王社 村の鎮守なり、」（※13）とあります。

※13『新編武蔵風土記稿 第十巻（大日本地誌大系）⑯』雄山閣（平成 8 年 6 月 20 日発行）「西方村」171 頁

歴史（境内の案内板より引用）

日枝神社（ひえじんじゃ）の勧進年は不詳であるが、元荒川をひかえた奥州街道に面した古社の一つである。もとは山王社（さんのうしゃ）と称され、東光院、利生院、神王院、安楽寺、薬王寺、観音寺の六寺院を配下におさめていた大きな社であった。その後、江戸時代に四寺が大相模大聖寺の塔頭（たっちゅう／寺内）に移され、一寺が廃寺となったが、山王社は西方村の鎮守に位置づけられた。

明治の初年、山王社は日枝神社（ひえじんじゃ）と改称。明治 40 年（1907）西方村の八幡神社、稲荷神社、愛宕社、天神社などを合祀している。現在は、大山咋命（おおやまくいのみこと）、素戔嗚尊（すさのおのみこと）、菅原道真（すがわらのみちざね）、大己貴命（おおあなむちのみこと）など 15 柱を祭神として祀っている。

二匹の猿

鳥居の両脇に、山王さまの使い（神使＝しんし）とされる丸彫り彫刻された二匹の猿（二猿）が座っています。

・不動排水機場

不動排水機場は 越谷市相模町 6-3843-1 にある排水機場です。

不動排水機場の役割

大雨で元荒川の水位が上昇すると、排水路へ逆流してしまうので、水門をしめます。すると、行き場をなくした排水路の水は、住宅地にあふれて水害を起こしてしまいます。不動排水機場は、排水路からあふれそうになっている水をポンプでくみ上げて、元荒川へ排水し、地元住宅地の浸水被害を未然に防ぐ役割を担っています。

〇相模町スポット公園（トイレ休憩）

不動橋の東側、元荒川右岸側の元荒川緑道沿いにあるトイレが併設された広場です。住所は越谷市相模町 6-452。

相模町スポット広場は、毎年、昭和の日（4 月 29 日）に行なわれる「不動橋こいのぼりフェスティバル」の会場にもなっています。

〇不動橋

越谷市東越谷と相模町の間を流れる元荒川に架かる不動橋通り（市道 2200 号線）の道路橋です。

＜不動橋のデータ＞
［よみ］ふどうばし
［構造物種別］橋梁
［路線名］市道 2200 号線
［完成年(度)］1993 年（H5 年）
［延長］134m
［幅員］13m
［管理者名］越谷市
［所在市区町村］埼玉県 越谷市
［点検実施年度］H27
［判定区分］ 1（健全）

（出典）「全国Q地図（各種地形図閲覧）」
https://maps.qchizu.xyz/#15/35.889659/139.814672/&base=pale&ls=pale%7Cmlit_road2019_bridge_01&disp=11&lcd=mlit_road2019_bridge_01&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f2&d=m

・旧不動橋跡

現在の不動橋は平成 5 年（1993）に架け替えられたものですが、その前は、若干、今よりも

西側に架けられていました。

⑩不動の渡し跡

また、江戸時代、現在の不動橋の西側（大聖寺の北側）に、「不動の渡し」と呼ばれる渡し場が元荒川にありました。

旧不動橋跡と不動の渡し跡

※地図は OpenStreetMap から転載

（備考）旧不動橋跡と不動の渡し跡の位置は、越谷市郷土研究会・顧問の加藤幸一氏の指導のもと、須藤が OpenStreetMap を使って作図しました。

⑪大聖寺

大相模不動尊として親しまれている大聖寺（だいしょうじ）。住所は越谷市相模町 6-442。由緒記によると、その創立は、奈良時代の天平勝宝 2 年（750）、越谷最古の寺院と伝えられます。本尊は奈良東大寺初代の別当良弁僧正彫刻による不動明王像で、不動信仰の中心として繁栄しました。

（次のページへ続く）

明治 28 年（1895）、仁王門を除き焼失しましたが、戦国時代・元亀 3 年（1572）岩槻城代北条氏繁の掟書や、家康宿泊の寝衣、家康奉納による太刀、その他古記録などは持ち運ばれて

焼失を免れました。

また境内には樹齢 500 年というタブノキの古木や、江戸後期・天保 6 年（1835）造塔の百庚申などがあります。

（出典）越谷市制施行 40 周年記念誌『市制施行 40 年の足跡 ときを超えて』越谷市（平成 10 年 11 月発行）『大聖寺』280 頁から引用

大聖寺の主な見どころ

・山門
・百庚申
・石塔群
・喜多向不動
・卍亀碑
・タブノキ
・降魔の松
・御座の松
・冬至梅
・中村有道軒の碑

◇大聖寺について詳しく知りたい方へおすすめの資料

越谷市立図書館主催
平成 30 年度郷土歴史講座 越谷市制施行 60 周年記念
「大相模地区西部の歴史」（講師 加藤幸一氏）
http://koshigayahistory.org/h30_lectures_in_the_library.pdf

「大相模地区西部の歴史」は下の QR コードで閲覧可能

〇奥州古道（元荒川緑道）

内池跡（おいてけ堀）→大相模久伊豆神社→日枝神社とつないできた奥州古道は、不動橋を越え、元荒川緑道に沿って、元荒川右岸沿いを南西へ、ほぼ直線に、しらこばと橋に向かって延びていきます。

途中にある主なスポット
・堂端落しスポット広場
・堂端落し排水機場
・斎藤豊作（※14）生家跡
・瓦曽根堰スポット広場

※14 斎藤豊作（さいとうとよさく）は、越谷が世界に誇る美術家です。

斎藤豊作（1880～1951）…西方村の旧家斎藤家に生まれる。フランスで新印象派の画風を習得し、第７回文展に「落葉かき」と「夕映の流れ」の２点を出品し、見事褒状を受賞。「夕映の流れ」は、代表作として東京国立近代美術館に収蔵されている。石井柏亭ら 10 人と共に文展洋画部門に第二科（のちの二科展）を創立した。大正４年（1915）に豊作が母校の大相模小学校に寄贈した絵画「風景」は、現在市立図書館に展示されている。

（出典）『越谷市制施行 60 周年記念誌』越谷市（平成 30 年 11 月発行）「越谷ゆかりの著名人」90 頁から引用

〇旧赤水門スポット広場

越谷市相模町７丁目にある広場です。

江戸時代初期に草堰（くさぜき）、前期に石堰（いしぜき）であった瓦曽根堰（かわらぞねぜき）は、大正 13 年（1924）に鉄筋コンクリート造りの門 10 門を備える堰として竣工。その色彩により赤水門（赤門）と呼ばれ親しまれてきましたが、その後取り壊されて平成９年（1997）に現在の姿となりました。

（出典）越谷リバーウォークガイドブック編集委員会（2022）「越谷リバーウォークガイドブック」NPO 法人越谷住まい・まちづくりセンター／越谷リバーウォークプロジェクト実行委員会発行「旧赤水門スポット広場」26 頁

〇しらこばと橋

しらこばと橋は、越谷市東越谷と相模町の間を流れる元荒川と瓦曽根溜井に架かる越谷八潮

線（埼玉県道 115 号）の道路橋です。橋塔からななめに張ったケーブルで橋を支える市内初の斜張橋で、越谷周辺に生息するシラコバトにちなんで名づけられました。

＜しらこばと橋データ＞
［よみ］しらこばとばし
［構造物種別］橋梁
［路線名］県道越谷八潮線
［完成年(度)］1994 年（H6 年）
［延長］145.1m
［幅員］12m
［管理者名］埼玉県
［所在市区町村］埼玉県 越谷市
［点検実施年度］H26
［判定区分］３(早期措置段階)

（出典）「全国Ｑ地図（各種地形図閲覧）」
https://maps.qchizu.xyz/#15/35.889659/139.814672/&base=pale&ls=pale%7Cmlit_road2019_bridge_01&disp=11&lcd=mlit_road2019_bridge_01&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f2&d=m

⑫元荒川中土手

中土手（なかどて）は、葛西用水（瓦曽根溜井）と元荒川の間にある遊歩道です。元荒川中土手、葛西用水中土手などとも呼ばれています。

瓦曽根溜井

慶長年間（1596～1615）に造成されたと推定されている瓦曽根溜井（かわらぞねためい）は、昭和 35 年～42 年に行なわれた葛西用水と元荒川とに分ける用排水分離工事により、新たに葛西用水として造成された流路の西側が埋め立てられて、現在の越谷市役所や県の地方庁舎が建設されました。

（出典）越谷リバーウォークガイドブック編集委員会（2022）「越谷リバーウォークガイドブック」NPO 法人越谷住まい・まちづくりセンター／越谷リバーウォークプロジェクト実行委員会発行「瓦曽根溜井」26 頁

⑬旧平和橋跡

江戸時代に、現在の平和橋の下流に、瓦曽根橋（溜井橋）の名で橋が架かっていて、戦時中に橋はなく、戦後の昭和 24 年（1949）に平和橋と名を変えて再建されました。

（出典）越谷リバーウォークガイドブック編集委員会（2022）「越谷リバーウォークガイドブック」NPO 法人越谷住まい・まちづくりセンター／越谷リバーウォークプロジェクト実行委員会発行「平和橋」22 頁から引用

昭和 42 年（1967）に完成した現在の平和橋の竣工に伴い、旧平和橋は姿を消しました。旧平和橋が架かっていた場所は、朝日バス「瓦曽根一丁目」バス停あたりです。

・団子屋の渡し跡

また、かつて、旧平和橋から 50 メートルほど上流に、「団子屋の渡し」と呼ばれる渡し場がありました。

旧平和橋跡と団子屋の渡し跡

旧平和橋があった当時は、元荒川と葛西用水（瓦曽根溜井）は分離していませんでした。

地図は OpenStreetMap から転載

（備考）旧平和橋跡の位置は、越谷市郷土研究会・秦野秀明氏の「今昔マップ」を利用した指導のもと、団子屋の渡し跡の位置は、越谷市郷土研究会・加藤幸一氏の指導のもと、須藤が OpenStreetMap を使って作図しました。

⑭平和橋

平和橋は、越谷市越ヶ谷と東越谷の間を流れる葛西用水に架かる市役所前中央通り（市道

1130 号線）の道路橋です。

＜平和橋のデータ＞
［よみ］へいわばし
［構造物種別］橋梁
［路線名］市道 1130 号線
［完成年(度)］1967 年（S42 年）
［延長］25.5m
［幅員］10.5m
［管理者名］越谷市
［所在市区町村］埼玉県 越谷市
［点検実施年度］H27
［判定区分］ 1（健全）

（出典）「全国Q地図（各種地形図閲覧）」
https://maps.qchizu.xyz/#15/35.889659/139.814672/&base=pale&ls=pale%7Cmlit_road2019_bridge_01&disp=11&lcd=mlit_road2019_bridge_01&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f2&d=m

平和橋と新平和橋
元荒川に架かる新平和橋と葛西用水に架けられている平和橋は、つながっていてひとつの橋のように見えますが、別々の橋です。

昭和 35 年（1960）から始まった元荒川と葛西用水の用排水分離工事により、現在より少し下流に架かっていた旧平和橋の架け替えとして建設が開始されました。

まず、元荒川に新たに新平和橋が昭和 41 年（1971）に完成。引き続き、旧平和橋の架け替えとして新たな平和橋が翌年（昭和 42 年〈1972〉）に完成し、現在の形になりました。

（出典）越谷市制施行 40 周年記念誌『市制施行 40 年の足跡 ときを超えて』越谷市（平成 10 年 11 月発行）「新平和橋と平和橋」92 頁

〇越谷駅
現在の越谷駅は、東武伊勢崎線の複々線高架化に伴い、平成 9 年（1997）に、高架駅になりました。

「往古奥州道」は「大河の自然堤防（跡）上」の古道

秦野 秀明

1．「史料」における「往古奥州道」

江戸時代**後期**の文化年間(1804～18)より文政五年(1822)に至るまでに成立したと推定されている福井 猷貞(ゆうてい)『越ヶ谷瓜(うり)の蔓(つる)』（注 1）では、

「**往古奥州道**(おうこおうしゅうどう)（江戸時代**後期**から見た大昔の奥州道)」の経路を「南百西方(なんどにしかた)堤通」と記載しています。

つまり、

現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「**元荒川（利根川本流）右岸の自然堤防上**」の古道を、「**往古奥州道**」の経路として記載しています。

2．江戸幕府作成の「国絵図」における「往古奥州道」

この区間の経路の記載を証明するものとして、

『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古」に相当する江戸時代**前期**の正保(しょうほう)元年（1644）に幕府より作成が命じられた「**正保国絵図**(くにえず)」（注 2）があります。

この「国絵図」における現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「**元荒川（利根川本流）右岸**」にぴったりと沿うように「**赤い線**」で「**往還（道）**」が描かれています。

3．「地形」から見た「往古奥州道」

国土地理院の「**地理院地図（電子国土 Web）**」（注 3）には、「**自分で作る色別標高図**」があり、任意の「標高区分」と「色別(わ)け」を行うことによって、土地の僅(わず)かな「高低差」が良く判るデータとして入手することが可能です。

現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「**元荒川（利根川本流）右岸の自然堤防上**」及び「同河川の旧河道と推定される左岸・右岸の自然堤防上」以外は、標高 3.5m にも満たない低地が広がり、『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古」に相当する江戸時代**前期**より以前の時代に、「**往還（道）**」が存在したと推定することが難しい「地形」となっています。

さらに、『越谷市史 第一巻 通史上』（注 4）によれば、旧・南百村や旧・西方村を含む越谷市大相模(おおさがみ)地区には、歴史時代に入ってからも広大な「**大相模沼**」が存在したことが記載され、『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「往古」に相当する江戸時代**前期**においても、「**大相模沼**」の存在は不明ながらも「新田化」が行われる以前の「後背湿地(こうはいしっち)」が広がっていたことは、「**自分で作る色別標高図**」のデー

タからも疑いのない事実と云えます。

つまり、

「**史料**」や「**国絵図**」における「**往古奥州道**」の経路と同じで、現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、「**元荒川（利根川本流）右岸の自然堤防上**」に「**往古奥州道**」が存在したと推定することが、「地形」的にも合理的に説明の出来ることになります。

4．「先行研究」における「往古奥州道」

「論文」においては、「冒頭」において「先行研究」の成果を記載することが研究における鉄則となりますが、本稿では便宜的に「文末」に記載致します。

以下は代表的な「先行研究」の成果となります。

1．本間 清利（1975）「日光・奥州道中の成立」『越谷市史 第一巻 通史上』
越谷市役所 pp. 550-553
「千住・八条・大相模を経て瓦曾根の荒川**堤防上**を進み」

2．本間 清利（1975）「千住・栗橋間奥州道の変遷」『日光街道繁盛記』
埼玉新聞社 pp. 10-17
「当時この奥州道は、越ヶ谷町の旧記『越ヶ谷瓜の蔓』によると、千住から大原通りを経て八条に至り、利根川の堤防上を柿ノ木・別府・四条・南百と進み、これより荒川**堤**を大相模・瓦曾根を通って越ヶ谷に出たとある」

3．埼玉県立歴史資料館（1982）「中道（奥州道）」『埼玉県歴史の道調査報告書 県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』埼玉県教育委員会 pp. 7, 8
及び**附図** p. 3
「越谷市と吉川町の境界吉川橋で西に折れ、元荒川**沿い**に越谷市相模、本町、野島を経由して来る道である。越谷市では、この道を奥州道と呼び、また八潮でも同様に奥州道あるいは奥古道の呼称を遺（のこ）している」

4．川口市教育委員会編（2005）
『越谷道をたどる 赤山街道総合調査報告書２』
川口市教育委員会 pp. 1-41
現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間の内、旧・西方村村内の「現・不動橋」南詰付近より西側の経路及び「現・越谷市道 2200 号線」、「現・越谷市道 40336 号線」、「現・越谷市道 80585 号線」、「現・主要地方道越谷・流山線」に凡そ沿った明治 13 年（1880）測量の「迅速測図」に記載される古道を、「**赤山街道**」の「**枝道**」として「定義」させました。

5．小峰 俊彰（2010）『地域を見る目を養う教材開発の工夫

越ヶ谷宿の成り立ちと街道を行き交う人々に着目して』
埼玉県教育委員会 長期研修教員報告 平成 21 年度 pp. 6. 7
「中世においては鎌倉街道中ノ道が奥州方面への主要な交通路であり、越ヶ谷を通る元荒川**自然堤防上**の道は回り道のような性格があったのかもしれない」
「自然堤防上には古くから集落形成の痕跡が見られ、[中略]律令時代の条里制がこれらの自然堤防上に展開していたことが推定される。上の「奥州海道」もこの**自然堤防上**に作られたものである」

6．加藤 幸一（2011）「江戸時代以前の越谷を通る古奥州道（一考察）」
『古志賀谷』第 16 号 pp. 17-26
http://koshigayahistory.org/349.pdf
「南百から西方にかけての元荒川の**土手道**は、ほぼ昔のままに留めていると思われる。中川沿いの八条提より、引続き元荒川沿いの**土手道**を西に進んだのであろう」

7．秦野 秀明（2011）「「往古奥州道」と「押立堤」について」
『古志賀谷』第 16 号 pp. 27-38
http://koshigayahistory.org/239.pdf
『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「**往古奥州道**」における「**通**」と「**通り**」の「意味の違い」の「定義」を確立させ、加藤 幸一（2011）においてもその「定義」が「引用」されました。
『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「**往古奥州道**」における現・越谷市内の旧・南百村より旧・西方村に至る区間は、
「**南百角ゟ西方**」と記載されています。

8．加藤 幸一（2018）「平成 30 年度郷土歴史講座 越谷市制施行 60 周年
大相模地区西部の歴史」
http://koshigayahistory.org/h30_lectures_in_the_library.pdf
「大相模郷より越ヶ谷町の中町までの往古奥州道」と題した加筆した地図が、2 点収録されました。
川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「**赤山街道**」の「**枝道**」も、「古道」として「加筆」されています。

9．加藤 幸一（2023）「令和 5 年度郷土歴史講座
江戸時代以前の越谷を通る奥州古道（令和 5 年改訂版）」
「南百の角より大相模の西方村へ進む奥州古道 は、中川（古利根川）沿いの八条堤より引続き元荒川沿いの右岸の**自然堤防上**を西に進んだのであ

る」
「元荒川に沿って江戸時代から続く自然堤防上の古道がある。これも奥州古道である。南百の角から吉川県道（大相模不動尊通り）を通って東埼玉道路を突っ切り、浄音寺の前を通って大相模保育所バス停に向かって進む古道である」

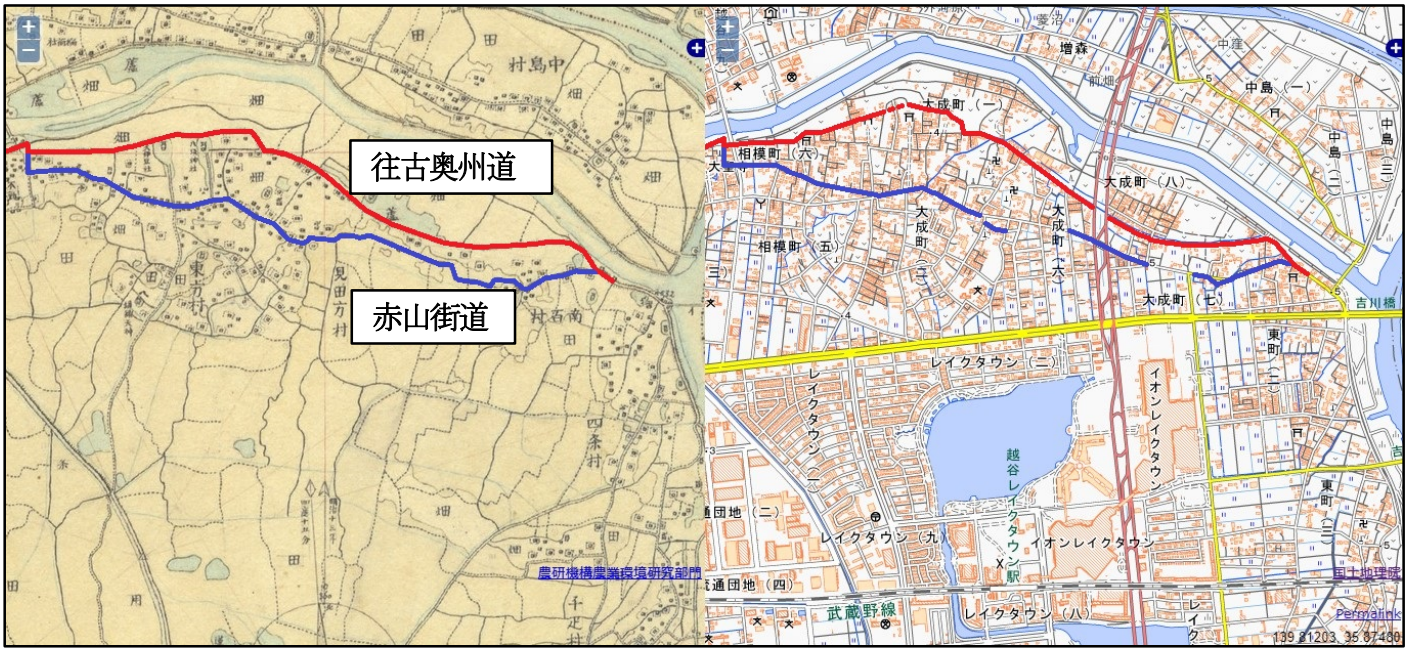
川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「赤山街道」の「枝道」を、『越ヶ谷瓜の蔓』に記載された「**往古奥州道**」とは別の名称である「**奥州古道**」として記載されています。

残念ながら、
本稿の「１．２．３．」で考察してきましたように、川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「赤山街道」の「枝道」の内で、「現・不動橋」南詰付近より西側の経路以外は「自然堤防上」ではないために、加藤 幸一（2023）で記載された「**奥州古道**」は、江戸時代**前期**より以前から存在した「古道」であるということは、ほぼ無いと推定出来ます。

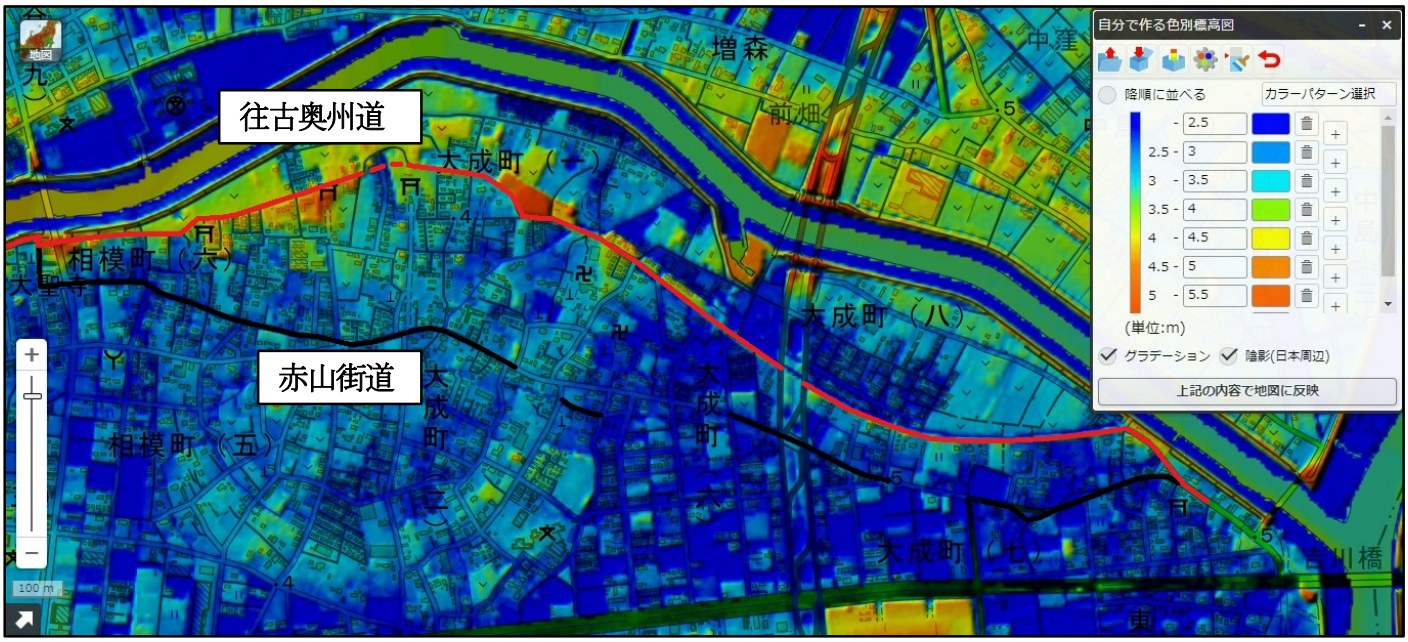
以下は、管見の限り「先行研究」の見当たらない筆者の仮説となります。
「**寛保２年（1742）の大水害**」及び「**天明６年（1786）の大水害**」以降に、「**元荒川（利根川本流）右岸の自然堤防上**」に存在した「**往古奥州道**」の「バイパス道」として「新たに建設」されたのが、川口市教育委員会編（2005）で「定義」された「赤山街道」の「枝道」である「古道」であると推定しました。

この仮説を補強、補説することが、今後の筆者の課題となります。

（注１）（1972）『越谷市史 第四巻 史料二』
越谷市役所 pp.44-78
「[前略]慶安以前元道中ハ、千住ゟ大原通八条堤ゟ南百西方堤通
瓦曾祢溜井堤ゟ六本木中町横の筋往還成しを、[後略]」
（注２）東京市役所編（1994）『東京市史稿 市街篇 第６』附録
復刻版_臨川書店
（注３）https://maps.gsi.go.jp/#5/36.104611/140.084556/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1
（注４）新井 鎮久（）「自然堤防の発達と湖沼の形成」
『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市役所 pp.47-50



△　農研機構 農業環境研究部門　「歴史的農業環境閲覧システム」
「比較地図」
向かって左は「迅速測図(明治 13 年(1880)測量)」
向かって右は国土地理院「地理院地図」
より加筆して引用：秦野 秀明



△ 国土地理院
「地理院地図(電子国土 Web)」
「自分で作る色別標高図」
より加筆して引用：秦野 秀明